

関口高史 陸自88 著

『牟田口廉也とインパール作戦』

日本陸軍「無責任の総和」を問う

編集委員会

牟田口は本当に愚将だったのか。インパール作戦は全く実現の可能性がなかったのか。本書は、この問いに真摯に向き合う。そのため、まず陸軍のメカニズムについて考察する。次に牟田口の実人物像について、あまり知られてこなかった生い立ちや陸軍でのキャリアについて触れ、表に出ることがなかった回想や文章を分析、加えて彼のことを知る人々の証言等を基に追求する。

インパール作戦については各指揮官、参謀の信念や発言について徹底的に評価する。また作戦の本質を理解するため、新たな視点として情勢の変化を「必要性」として把握、続いて作戦環境の諸問題を「可能性」として確認、そして第15軍司令官、ビルマ方面軍司令官、南方総軍司令官、大本営において行われた状況判断について網羅している。

その結果、牟田口は当時の陸軍の在り様から考察すれば決して愚将などではなく、牟田口ではどうするこ

ともできない巨大な意思が働いており、限られた条件の下、本作戦を遂行したとする。

加えて本作戦は端から実現の可能性がなかったものではなく、牟田口だけでは回収できない世代間の考え方の相異、指揮官の意思とは異なる作戦を追求する参謀や、指揮官への不誠実な対応に終始する参謀の存在、これら無責任の総和が重なり、失敗したと示唆する。ただし作戦の全ての責任は指揮官、唯一人しか負うことができないのは事実である。牟田口は組織に魂を注ぐチーム作りにも失敗している。これらは牟田口自身も反省していると付言する。

著者は元防衛大学校准教授であり、戦略教育を専門とする。これまでもガダルカナル戦における一木支隊の戦いに焦点を絞った著作、日米開戦に至った経緯を通史的に考察する著作などがある。

(光文社新書 1188円・税込)

牟田口廉也と

インパール作戦

日本陸軍「無責任の総和」を問う

軍事研究の

プロフナシヨナルが、

従来から牟田口像と

インパール作戦の

常識を覆す。

